

安部公房『箱男』論

——匿名化された監視を超えて——

片野智子

「キーワード ①安部公房 ②『箱男』 ③パノプティコン ④覗き ⑤書くという行為」

1、問題提起

安部公房の長編小説『箱男』は、一九七三年三月に新潮社より《純文学書き下ろし特別作品シリーズ》の一作として刊行された。本作品は表題付きの二十四の章から構成されており、章の切れ間には安部公房自身によって撮影された八枚の写真と短い文章が挿入されている。物語は箱男の「ぼく」が自分とそっくりの贗箱男に出会ったことで、病院を舞台とする陰謀に巻き込まれていく「ノート」の記述を主軸として、箱男になるための箱の製造法や、少年Dが隣家の女教師を覗き見る話といった断片的な挿話から成立している。

これまでの研究では、『箱男』の作品構造について、あるいは箱男という存在の象徴性について、論じられることが多かった。『箱男』の作品構造の問題について最も早く言及したのは平岡篤頼であり、贗箱男との対話によって箱男が「記述者」か

ら「作中人物の一人」に追い落とされる過程に着目し、「ノート」の「記述者」が次々と移行していく「メカニズム」こそが箱男の基本構造であるとした。^{注1}これに対して、真銅正宏は「ノート」の書き手をめぐる箱男と贗箱男の対話の根底には「作者と読者の同居と対話の発想」があり、彼らの反転は作者と読者の反転であるとしている。のみならず、本文の合間に挿入された写真や定点の不明な語りといったあらゆるレベルの越境が、本作品を「通常の小説概念に収められないもの」にしていると述べている。^{注2}箱男の象徴性について、田中裕之は「匿名性をめぐる安部の思想的営為が託された存在であるとともに、ついには現代的な犯罪の行為者となってしまう人間関係に失調をきたした社会不適応者でもあり、さらには作者自身が戯画化された存在でもある」と述べている。^{注3}八角聡仁は、箱男とはそれ自身が一つの「カメラ・オブスクラ」であり、『パベルの塔の狸』の眼だけを残して透明人間になってしまった主人公と同じように、

一個の眼球となった存在」であるとも指摘している。^{注4}

ここ最近の研究動向では、佐々木幸喜が一九七一年三月三日から安部が行っていた演劇研究会の筆記「演劇講義ノート」を手掛かりにして、『箱男』の題材がエドワード・ホール著「かくれた次元」とコンラート・ローレンツ著「攻撃 悪の自然誌」及びハロルド・ピンター著「かすかな痛み」であると述べている。^{注5} 佐々木は新聞記事、写真付きの文章、戯曲、ないしは詩といった小説以外の表現をモザイク的に編み込むことで成立している『箱男』の特殊な文体に着目し、それがどのような書物の引用によって成り立っているのかについて明らかにした。他にも、一九六四年に放送された寺山修二のラジオドラマ「箱」と『箱男』の関連性について論じたものや、山口昌男の「異人論」を手掛かりに本来浮浪者として「周縁性」の象徴とされていた箱男が、箱を媒介にすることで「見る者／見られる者」「中心／周縁」といった二項対立を無化していく様子を論じたもの^{注7}がある。

しかし、これまでの研究では、何故箱男が覗くという行為に固執するのか、それが具体的にどのような作用を持つものなのか、また、覗くことと書くこととの間にどんな関連性があるのかについては深く研究されてこなかった。そこで本論では、『箱男』にみられる監視と権力の問題を通して、覗くという行為の意味について考えたい。更に、「ノート」の真の書き手としての立場をめぐる「ぼく」と贗箱男の対話、あるいは軍医と医者^{注6}の記述から、相手の書いていることを書くという行為が、

果たしてどのような意味を持つているのかについて考察する。最後に、「ぼく」と看護師の関係性の変遷を追うことで、覗くという行為における権力性が相対化される可能性を探ってみたい。

2、覗くということ

まず、箱男のもつ覗きの権力について考察したい。箱男の「ぼく」は、箱を加工する際に最も重要なのは、「覗き窓」の取り付け方であると言う。この「覗き窓」に取り付けられた「艶消しビニール幕」の隙間から覗くことで、箱男は相手から自分の姿を見られることなく一方的に見ることが出来る。その隙間は「無防備な箱男にとつての、数少ない護身術の一つ」^{注8}だと言う。実際に、この「覗き窓」から相手を見ることで、箱男は「警官や、鉄道公安官でさえ、尻込み」させることが出来る。何故そのようなことが可能なのか、そこには視線のもつ権力性が深く関わっている。

ジャン＝ポール・サルトルは、『存在と無』^{注8}において、「私の根源的な失墜とは、他人の存在である」と述べた。サルトルによれば、他者から眼差しを向けられるということは、人間を自由な存在から固定された物体へと変えてしまう脅威である。見ることが他人を物化する権力的な行為であり、人間は互いに眼差しを向けあうことで、見る権利をめぐる絶え間なく争っている。そうした見られるか見られるかの闘争を、彼は「相克」と呼んだ。『箱男』において描かれる視線の権力性は、このサルトル

ルの「相克」に通じている。以下の引用は、『箱男』に挿入された写真の中の一枚の下に書かれた短い文章である。

見ることに愛があるが、見られることには憎悪がある。

見られる傷みに耐えようとして、人は歯をむくのだ。しかし誰もが見るだけの人間になるわけにはいかない。見られる者が見返せば、こんどは見えていた者が、見られる側にまわってしまうのだ。

ここで表されているのは、見ることは権力的な行為だが、同時に見ることで見られることは一対であり、〈見る―見られる〉は決して切離すことができないということである。サルトルもまた、〈見る―見られる〉という関係の根底にあるのは相手の自由を奪おうとする人間の本質的な欲望であり、それ故に視線をめぐる他者との闘争には永遠に決着がつくことはないと述べている。このようなサルトルの論は、見ることの権力性が見られる側への転落を防ぐことができないことを否応なく示している。ところが、箱男という存在は、他者に見られることなく見る、すなわち覗くことができるという点において、こうした眼差しの戦いに巻き込まれることのない特権的な立場にある。警官や鉄道公安官が、社会的な立場から見れば自分より遥かに弱い存在である筈の箱男の視線に恐怖を感じるのには、見られるばかりで決して見返すことができないからである。それ故に、世間の人々は箱男に対して「見て見ぬふり」を決め込むことで、

存在自体を脳裏から消し去ろうとする。裏を返せば、それほどまでに箱男の視線は人々にとって脅威であるということだ。

顔を隠して他者を見るというテーマは、既に『他人の顔』（一九六四年）において描かれたものだが、仮面と箱の役割は根本において全く異なっている。第一に、『他人の顔』の仮面は、顔面に火傷を負った主人公が、そのために纏れてしまった妻との関係を修復するために作り出したものであるが、『箱男』の箱は〈見る―見られる〉という関係性を拒絶し、他者を一方的に覗くためのものである。第二に、『他人の顔』の男は火傷を隠すために仮面を被らざるをえなかったが、『箱男』の「ぼく」は進んで箱の中に自らを閉じこめている。それによって「ぼく」は、自己の身体を他者の視線から覆い隠し、「匿名の都市」の「匿名の市民」となる。「箱から覗くと、風景の裏に隠された嘘や下心も見とおしなのだ」と「ぼく」が言うように、箱男の持つ匿名の眼差しは、他者の内側へと深く食い入る力を持つ。それは、サルトルの言う自己を物化する他者の視線とはまた違ったものである。

そのような匿名的な視線が権力性を持つ例を考えるなら、ミシェル・フーコーが提唱した「規律訓練」の権力が挙げられよう。規律訓練型の権力とは、個人の身体への持続的な監視を媒介にすることで、人の内省を促し、個人の内面を形成する権力のことである。フーコーは『監獄の誕生』において、規律訓練型の権力の物質化した範型を、18世紀末にベンサムによって考案されたパノプティコン（一望監視施設）^{注9}に見ている。パノプ

ティコンとは、中央に監視塔を置き、その周囲に独房を円形に配置した監獄のことである。監視塔から差し込む光によって、独房の中の囚人は監視塔の中からよく見えるが、囚人側からは監視塔の中は暗くて見ることができない。つまり、囚人は実際に監視塔に人がいるかいないかに関わりなく、むしろ、いるかいないかが決して分からないというその不確定性によって、自分が監視されている可能性に常に怯えていなければならぬ。

他方で、囚人には守るべき規則が予め与えられている。この〈見られてゐるかもしれない〉という「顔を欠く視線」への恐怖と、守るべき規則があることの関係によって、囚人は自己監視を促される。つまり、「顔を欠く視線」が内面化されることで、〈自己を見る自己〉＝〈監視する自己〉と〈自己に見られる自己〉

＝〈監視される自己〉に主体が二分化され、自ら規律に従うようになるのである。以上のようなパノプティコン的監視の方法は、病院や仕事場や学校など、社会のあらゆる面に見出せるものである。パノプティコンの機制が明らかにしているのは、権力に抵抗する可能性さえ持つ主体が、それ自体、権力によって生み出されたものであるということに他ならない。規律訓練型の権力における主体化＝従属化の仕組みとはこのようなものであり、これによって近代的な主体の限界を指摘したのがフーコーの効験であったとされる。

こうした規律訓練型の権力（＝パノプティコンの監視側の権力）は、箱を被ることで自らの身体を他者の視線から隠す箱男の存在に通じるものがあるだろう。というのも、そもそも「ぼ

く」が箱男となることを選んだのは、小学校の学芸会で引き起こした失敗が原因で、他者の視線に対して強い違和感を覚えるようになったのがきっかけだからである。「トンマ」という馬の役に抜擢された「ぼく」は、舞台上で台詞を忘れ、馬の飼い主役だった同級生を怒らせ喧嘩となる。その結果、劇は中断してしまい、「ぼく」はそのトラウマが元で、他者の視線に対して強い恐怖を感じるようになる。この時、舞台上の観客と役者は、覗く者と覗かれる者の関係性にあることに注目したい。

この学芸会の事件の後、「ぼく」はわざと活字の小さな本を顔すれすれで読むなどして、「ひどい近視眼」になる。「ぼく」はその理由を「見ることから、見られることから、ただ逃げ出したかったのだ」と説明している。これらの事から分かるように、「ぼく」は他者との間に〈見る―見られる〉という関係を築くことに恐怖を覚え、その外部に立つて覗くために箱男となることを選ぶ。それは、「ぼく」自身が「考えてみると、しじゅう覗き屋でいつづけるために、箱になったような気持ちでくる」が、「世間を穴だらけにするわけにもいかず、そこで思いついた携帯用の穴が箱だったのかもしれない」と語っている通りである。フーコーによれば、「〈一望監視装置〉は、見る＝見られるという一対の事態を切離す装置であって、その円周状の建物の内部では人は完全に見られるが、けっして見るわけにはいかず、中央部の塔のなかからは人はいっさいを見るが、けっして見られはしない」と言う。ここでは一対の関係であった筈の〈見る―見られる〉の分離が起きている。したがって、

「ぼく」が箱男となることを選んだのは、箱という監視塔に閉じこもり、「顔を欠く視線」そのものとなることで、周囲を一方向的に監視しようとしたためだと思われる。

ただし、フーコーのパノプティコンでは、囚人に「自分は常に監視されている」と思いこませること、つまり囚人側の主体を形成することが重要なのであって、塔から覗く監視者の視線は、単一でも、複数でも、あるいは現実には存在していなくとも成立する。その点で、塔から覗く視線は完璧な匿名性を有している。「全国各地にはかなりの数の箱男が身をひそめているらしい痕跡がある」筈が、現実には誰も箱男の正体を知らないという点において、箱男の視線もまた匿名的である。だが、パノプティコンの体現する完璧な匿名性なるものを人が手にした時、そこに待ちうけているのは何であろうか。「ぼく」は箱を被って街を歩き回ること、「箱」でもない人間でもない、「化物」へと変わってしまう。小さなパノプティコンとなった「ぼく」は、覗くことの権力を手に入れる代わりに、「匿名化し」、「箱をかぶって、ぼく自身でさえなくなつた、贖のぼく」という、人間と呼べるどうかすら不確かなものへと変わっていく恐怖を背負うことになるのだ。

3、書くという行為

箱男という存在は自ら移動する小さなパノプティコンを思わせる。ところが、贖箱男の登場によって「ぼく」の小さな権力としての覗く力は大きく揺らぎ、同時に「ノート」の書き手と

しての権利すらも失う危機に陥る。ここでは「ノート」の真の書き手をめぐる登場人物達の対立の模様を追うことで、書くことと覗くことの間に如何なる共通点があり、それが「箱男」の物語にどのような影響を与えているのかを探りたい。

立小便の最中に空気銃で狙撃された「ぼく」は、犯人が坂の上の病院の医者であることを突きとめる。「ぼく」はその病院を訪れるが、そこで出会った看護婦に一目ぼれし、五万円の代わりに箱を譲り渡すことを約束する。ところが、医者と看護婦がグルになって自分を殺そうとしているのではないかと疑った「ぼく」は、万一のために自分が殺された証拠として、自筆の「ノート」を残しておくことを決める。このように、物語は当初「ぼく」の「ノート」の記述を中心にして進んでいくが、いざ病院に潜入した「ぼく」は自分とそっくりの贖箱男と看護婦の性交の現場を覗き見てしまう。「ぼく」は贖箱男に激しい嫉妬心を抱くと共に、「あの五万円を受け取った瞬間から本物の権利は向うに移り、ぼくの方が贖物になったと考えるべきかもしれないのだ」と不安を覚える。この時、「ぼく」の中で覗くことへの欲望が、覗く対象である彼女自体への欲望に変化したことで、贖箱男と「ぼく」のどちらが覗く側か監視側なのかという、小さなパノプティコンとしての立場をめぐる争いに突入することになるのだ。

そこで「ぼく」はこの対抗策として、「ノート」の中で贖箱男との交渉を試みる。書くことで贖箱男との対話をシミュレーションすること、つまり、贖箱男を「ノート」の登場人物の一

人にしてしまうことで、箱男としての「本物の権利」を取り戻そうとするのだ。ところが、贗箱男は「ぼく」に、彼女との交際を認める代わりに、「ぼく」と彼女が生活する様子を覗き見させてほしいと取引を持ちかける。この贗箱男の提案によって、「ぼく」は一転して覗く側から覗かれる側に立たされる。今までの「ぼく」は箱（＝小さな監視塔）の中の監視者として覗く対象を支配下に置こうとしていたが、贗箱男に眼差しを向け返されたことで、監視者から囚人の立場に落とされる。贗箱男の眼差しに対する「見られているのもぼくだが、見ているのも同じくぼくなのだ」という「ぼく」の言葉は、監視者（＝贗箱男）の視線を内面化してしまう囚人（＝「ぼく」）という関係性に重ねることが出来る。

この「ぼく」の監視者としての立場の揺らぎは、「ノート」の書き手としての立場の揺らぎにも繋がっている。「ノート」の登場人物の一人にすぎない筈の贗箱男に「このノートの筆者を、君だと決めてかかる必要なんかどこにもないんだ。君以外の誰かが筆者であっても、いっこうに差支えないわけだからな」と指摘されることで、「ぼく」は書き手としての立場を揺るがされる。一方、「ぼく」は「あなたたちを含めて、その診察室自体が、ぼくの箱の落書だったのさ」と言い、贗箱男との対話を含め、これまでに書かれたことはあくまでも「ぼく」一人の創作によるものと主張する。彼らが書き手としての権利を奪い合うのは、それが箱男としての「本物の権利」に繋がるものだからである。ここで、書く権利をめぐる抗争と覗くこと

をめぐる抗争が重なりあうのだ。

では、書く者と覗く者の間には具体的にどのような類似性があるのか。それは、書き手としての権利を得るために贗箱男が口にした、「ぼくのことを想像しながら書いている君を想像しながら、ぼくが書きつづけているのかもしれない」という言葉から伺い知ることが出来る。ここでは二つの書くという行為が登場する。まず、フーコーのパノプティコンとは、囚人に見られているかもしれないという意識を植え付けることさえ出来れば、現実の監視者がいてもいなくても構わないシステムである。代わって、匿名の視線に対する恐怖と、予め定められた規則の関係性こそが、囚人に自己監視を強いる。自己監視とは、一般的な言い方に変換すれば、アイデンティティを確立するということである。私は今こうしている、私とは規則を守るのような人間だ、という自己省察＝自己監視の繰り返しによって、主体は形づくられる。だとすれば、「ぼくのことを想像しながら書いている君」とは、知らない間に見られているかもしれないと想像しながら、与えられた規則に即して書くことで、自己省察＝自己監視を行っている「君」のことを意味している。つまり、監視される囚人としての「君」のことである。これが第一の、主体化＝従属化としての書くという行為である。

ここで重要なのは、「ぼく」の書くという行為が、主体化＝従属化としての自己監視へと転落するのは、その「君を想像しながら、ぼくが書きつづけているのかもしれない」ことが、贗箱男によって提示されるためだということである。この時、贗

箱男は「君」という囚人の匿名的な外部＝監視塔から、その自己省察ぶりを想像し、記述している者である可能性が生じてくる。これが第二の、囚人に自己監視を促すための匿名的かつ権力的な書くという行為である。ここで、贗箱男が「ぼくが書きつづけているのかもしれない」とあえて明言を避けるのは、パノプティコンの理論に照らせは、自分が誰かに書かれているかもしれない、監視されているかもしれないという不安を囚人に抱かせることこそが重要だからである。繰り返すように、パノプティコンにおいては、独房からは監視塔の中を伺い知ることができないために、囚人が本当に監視されているのかどうかは決して分からない。そのような不確定性がもたらす〈見られているかもしれない〉という恐れによって、囚人は自己省察＝自己監視へと走ることになる。更には、あらかじめ規則が与えられている以上、自己省察がその規則から外れた場合は、それがただちに記録され、罰されるかもしれないという不安が生まれ、囚人は二重に苦しめられることになるのだ。

かくして、自分の書く行為そのものが第三者によって記録されている可能性、つまり、自分自身こそが贗箱男の書く「ノート」の登場人物の一人にすぎないのかもしれないという可能性を突きつけられることで、これまで「ノート」の唯一の書き手として物語世界の外に立ち、贗箱男を始めとする登場人物たちを一方的に監視する側にあつた「ぼく」は、主体的に行っていた筈の書くことが、実際は、誰かに覗かれることで無意識に強いられている従属的な行いにすぎないのではないかという疑い

を持つてしまう。このように、自分が書くということ、それが誰かによって書かれているということは、まったく異なる意味を持ちながら結びつくことで、箱男を囚人に貶めると同時に、贗箱男を匿名的な権力へと反転させるものとなるのだ。

以上のように考えれば、覗くことの権力をめぐる争奪戦とは、「ぼく」の自己監視の記録が贗箱男の匿名的な視線によって監視されるか、反対に、贗箱男の自己監視が「ぼく」によってそうされるかの、主体化＝従属化の権力をめぐる争いになるだろう。書いている相手を書くことの権力をめぐる争いと言い換えても良い。「ぼく」と贗箱男が自分こそ「ノート」の真の書き手であると主張する時、目指されているのはこの権力である。ところが、パノプティコンの囚人が、誰かに覗かれているかもしれないという不安を煽られて、主体化＝従属化としての自己監視を始めるに至るのは、囚人側からはいつ、どこから、誰に覗かれているのか、あるいは本当は覗かれていないのか、一切分からないという視線の絶対的な匿名性によるものである。したがって、「ノート」の真の書き手はやはり贗箱男であつて、今この瞬間にも「ぼく」という存在は贗箱男に書かれている（監視されている）のだと「ぼく」が知つてしまえば、逆説的に見えざる視線の権力は無効化される。「ノート」の真の書き手が自分であることを相手に示したい、しかしそれが明らかになつた瞬間にその権力は失われる。そこには匿名の権力を個人が所有することの限界がある。それは、「ぼく」が箱男としての「本物の権利」を獲得してしまえば、「何でもないと

だの紙箱に、誰かがもぐって街に出たとたん、箱でも人間でもない、化物に変わってしまう」という、箱男の持つ匿名的な視線の権力性——どこにでもいるし、どこにもいないという、遍在する視線の化物としての力——を失ってしまうジレンマに通じている。

ところが、『箱男』では「ノート」の真の書き手が明らかにされるどころか、「ぼく」と贗箱男との対話がそれ自体外から監視され、別の「ノート」の登場人物の台詞として記述されている可能性が示唆される。例えば、贗箱男との対話の後、「ぼく」の語りは突然中断してしまう。この後、医者が書き手の《供述書》と、新たに登場した軍医が書き手の《Cの場合》、再び医者者の《続・供述書》、再び軍医の《死刑執行人に罪はない》が続く。《Cの場合》では、「ぼく」の手元にあった筈の「ノート」が医者者の元にあることが記される。ところが、軍医は医者者の「ノート」は贗物であり、自身が今書いている「ノート」が本物だと主張する。この軍医の記述によって、「ぼく」の書き手としての権利はまたもや揺るがされることになる。「ノート」の真の所有者が不確かとなってしまう今、贗箱男の言葉も、「ぼく」の「箱の落書」という主張も、医者あるいは軍医の創作である可能性が浮上してくるのだ。更に「紙が違うだけではない。はじめて万年筆が使用され、字体もあきらかに違っている。しかし、いずれ誰かが、別のノートにまとめて清書するとすれば、紙も字体も簡単に統一されてしまうはずだ。そう神経質に考えることもないだろう。」という注記によって、複数の

書き手や編集者の存在の可能性までもが示唆されることで、「ノート」の真の書き手の確定はますます困難になってしまう。

平岡は、『箱男』の基本構造は「ぼく」↓贗箱男(医者)↓軍医↓「ぼく」という記述権の移行にあるとしている。しかし、実際に記述権は移行している訳ではなく、作品内に書き込まれた数々の編集の跡が明らかにするように、「ぼく」・贗箱男(医者)・軍医は、書くことの権力性をめぐって絶えず争ってはいないが、その記述権が誰にあるかは最終的には確定できない状態にある。その不確定性こそが彼らの争いを駆り立てる要因となっているのであって、単純に「ぼく」が記述者から作中人物へ、あるいは作者から読者へ移り変わったと見なすことはできない。平岡の論を同様に批判した田中は、「複数の記述者が存在するかと思われたテキストは、結局のところただ一人の記述者の手による虚構の産物」であり、箱男の「ぼく」とは「物語外に位置する真の記述者」によって創り出された存在にすぎないとしている。田中によれば、真の記述者は「欄外の付記」や「欄外の註」といった編集の痕跡を書き記すことで、「ノート」の信憑性を高めている。一方で「そこに散りばめられた仕掛けや矛盾が、テキスト形成の真実を隠蔽する方向ではなく、暴露する方向へと作用する」のが、『箱男』の最も基本的な構造であると述べている。^{注10}

だが、この田中の論にも問題がある。何故なら、繰り返して言うように、この作品の内容全体からは「ノート」の真の書き手は決定不能であって、そこにこそ『箱男』の本質があるから

である。これは、パノプティコンの権力の本源が匿名的であることに対応している。匿名的だということは、装置自体は（誰が）権力の本源にいるのかという特定を免れたまま、強固な拘束性を発揮するということである。同様に、『箱男』に書かれたあらゆるものは、書かれた時点で、誰かによって記述され、監視されている可能性を常に孕んでいる。それは、田中自身が「ぼく」という箱男もまた、言葉による虚構の産物である」と指摘している通りである。だが、そこで示されているのは「物語外の真の記述者」なる者の存在などではなく、むしろ誰もが「ノート」の真の書き手でありパノプティコンの監視者たり得るという可能性、言い換えれば「真の記述者」の決定不能性である。

先にも述べたように、自分こそが「ノート」の真の書き手（パノプティコンの監視塔）から書いている相手を書く（監視する）側であることを示したいと思っても、それがはつきりと分かった瞬間に、匿名的な権力は消失してしまう。だからこそ、「ぼく・贗箱男（医者）・軍医は、相手を自らの書いた「ノート」の登場人物の一人に仕立てようとする争いを延々と繰り返しながら、自らが覗いている可能性だけをふりまこうとする。それは結果として、自分は誰かに書かれている（監視されている）のかもしれないという不安を彼らの内に残存させることになるのだ。その点で、『箱男』に描かれた四人の権力争いは、近代的な監視システムのマクロかつミクロな様相を見事に言い当てているといえよう。すなわちそれは、匿名的な視線は強大な権

力を発揮するが、それが作用するのはあくまでもそのシステムに組み込まれた個人の内部においてであるということだ。言い換えれば、監視権力の本源が誰にも特定できないことで、（自己を見る自己）≡（監視する自己）と（自己に見られる自己）≡（監視される自己）に主体は引き裂かれるが、そのような個々の主体の内部においてこそ監視権力は効果を発揮するということである。

ここで、「ノート」の真の書き手としての権利をめぐる闘争は、規則≡物語をめぐる闘争でもあることに触れておきたい。というのは、囚人が与えられた規則を守っているかどうかを監視するということは、監視者側が作った物語に囚人が従順か否かを監視することにもなるからである。例えば、医者が書き手の《供述書》《続・供述書》では、海岸公園に打ち上げられた箱を被った変死体が麻薬中毒に陥っていた軍医のものであり、その死が自殺であることが仄めかされる。一方、軍医が書き手の《Cの場合》《死刑執行人に罪は無い》では、医者が軍医を自殺と見せかけて殺害し、そのアリバイ作りのために箱を利用しようとしていたことが記される。このように、両者の記述は真つ向から食い違うものだが、重要なのは医者と軍医のどちらが本当のことを書いているのかではなく、二人が互いに相手を自らの作り上げる物語の登場人物にすることで、覗くこと≡書いている相手を書くことの権利を得ようとしていることである。むしろ、その争いに決着は着きようもない。

そのような終わりなき権力闘争から、「ぼく」自身が脱け出

す術はあるのか。そこで示されているのが、〈書く自己〉と〈書かれる自己〉の間のズレである。繰り返すように、自己について何かを書くということは、〈書く自己〉＝〈自己を見る自己〉によって〈書かれる自己〉＝〈自己に見られる自己〉を省察し記述するという点において、自己監視の意味合いを孕んでいる。だが、安部公房の『終りし道の標べに』（一九四八年）では、「私が行っているということ、それが書けるのは一体どんな言葉なのだろう」とある。そこで投げかけられているのは、書く行為と他の行為は果たして同時にできるのかという同時性に関する問題である。実際の行為とそれを自分で書くことの間には、必ず時間的な遅れが存在する。その遅延が新たな情報の介入を許し、結果として〈書く自己〉と〈書かれる自己〉はいつまでも統一されることはない。そのような〈書く自己〉と〈書かれる自己〉の間に存在するズレは、『密会』（一九七七年）においても登場する。

『密会』の主人公の男は、ある夏の朝、失踪した妻を探すために病院へと潜入する。男はカセットテープに録音された自らの行動を書き起こし、更にそこに注釈をつけ加えることで、妻の行方の手掛かりを探そうとする。それは、「テープに記録された断片を、ぼくだけしか知らない事実で修復し、彼というぼくが追い込まれた迷路の状況を、忠実に再現してみるつもりだ」とあるように、巨大な盗聴システムが支配する狂気に満ちた病院内で、自らの理性を保つための自己省察＝自己監視の手段でもあった。しかし、録音されたテープを聞きとり、更にそ

れを文字にして書き記すという作業は、膨大な時間を要するものであり、男は次第に「だんだん伸びていく自分の影と、鬼ごっこしている」ような感覚に囚われていく。『密会』の結末は、〈書く自己〉と〈書かれる自己〉の間のズレを埋めることがとうとうできなかつた男が、妻の元に辿り着けないまま、出口のない迷宮と化した病院の地下（それは男自身の意識の象徴でもある）に幽閉されるところで閉じられている。

『箱男』においてこの問題は、「ぼく」が贖箱男に「ノート」の執筆に掛かった時間的な矛盾を突きつけられることで露呈する。贖箱男によれば、二人の会話は「ノートのページ数でいうと、五十九ページ」もの分量であり、それを一時間三十四分間に書くことは絶対に不可能だと言う。ここでもまた、書くという行為における同時性の問題が浮上してくる。「ぼく」自身も「贖箱男に指摘された時間的矛盾はぼくも認めざるをえない」と、書くという行為と実際に書かれている行為との間に横たわる時間的な溝を否定できない。《書いているぼくと書かれているぼくとの不機嫌な関係をめぐって》という章題の通り、いくら言葉を尽くして書いたとしても、そこには同時性の問題があるために、書いている「ぼく」と書かれている「ぼく」が同じ「ぼく」であることが「ぼく」には証明できないのだ。

書くことによる自己省察＝自己監視を続けた結果、書いている「ぼく」と書かれている「ぼく」は完全に分裂してしまう。医者が去った後、再び病院に戻った「ぼく」は、彼女に「白状するよ、ぼくは贖物だったんだ」と打ち明ける。そこで「ぼく」

は「でも、このノートは本物なんだよ。本物の箱男からあずかった遺書なのさ」と、これまで「ぼく」が書いていた「ノート」を見せる。この言葉によって、書かれている「ぼく」は「贗物」となり、書いている「ぼく」は「本物の箱男」となる。だが、その言葉の正しさを証明することはできないまま、書いている「ぼく」は「遺書」を残し物語から退場してしまふ。

この場面において、〈書く自己〉と〈書かれる自己〉のズレは決定的なものとなるが、そのズレはパノプティコンの機制から脱出する可能性としても見なすことができる。つまり、パノプティコン的な装置とは、匿名的な外部からの視線と、予め与えられた規律とによって、規則を守る自己、更には自己を見つめる自己を作り出すことにある。主体化Ⅱ従属化としての書くという行為もまたここから生まれる。だが、そのような〈自己を見る自己〉と〈自己に見られる自己〉の一致によって監視されることへの抵抗として、自己と自己との間にあるズレを作り出し、あえて強調してみせることが、書くという行為の持つまったく別の可能性として考えられるのではないだろうか。パノプティコンの機制においては、〈見られているかもしれない〉という意識が囚人に主体化Ⅱ従属化を強いるが、「ぼく」の抱く〈書く自己〉と〈書かれる自己〉のズレは、囚らずもこのパノプティコン的監視に対する抵抗となっているのである。

このように見るならば、平岡と田中は「ノート」の真の書き手は誰かという事から『箱男』の構造を明らかにしようとしたが、むしろそのような「真相」の追究を放棄したところにこそ、

この作品の本質は存在すると言つてよいだろう。つまり、「ぼく」・贗箱男（医者）・軍医が覗く権利Ⅱ相手が書いていることを書く権利を巡つて激しく闘争する物語として『箱男』を見た場合、その闘争には決着がつかず、贗箱男は「元の屑籠」に戻り、医者や病院から去り、軍医は死亡し、「ぼく」は彼女に見捨てられ、ついには病院にとり残される。一方で、「ぼく」は「真相」「真の筆者」「真の目的」「本物の箱男」といった言葉によって、物語を背後で動かしている大きな存在を示唆する。だが、その正体は決して明らかになることはない。こうした物語全体を包み込む不気味さ、不透明さは、まさにパノプティコンの匿名的な権力と響き合うものである。ところが『箱男』では、実際の行為と書くことの間には時間的遅延が存在するため、〈書く自己〉と〈書かれる自己〉は決して重ならず、それ故に完璧な自己監視がそもそも不可能であることが露呈される。それは、パノプティコンの権力に対する抵抗の可能性となり得るものである。そして、パノプティコン的監視を越える可能性は、看護師の彼女という存在によつても見出すことができる。

4、彼女について——ラストに込められた意味とは——

ここまで、覗くことⅡ書いている相手を書くことをめぐる争いについて考察してきたが、そのような権力闘争に決して巻き込まれない看護師の彼女は、物語において特権的な位置を保っているといえる。ここでは彼女と「ぼく」の関係性の変遷を追うことで、パノプティコンの支配性や覗くことの権力性が更に

相対化される可能性を明らかにしたい。

ただ元の世界に引き返すためだけに、箱を脱いだりするわけにはいかないのである。箱を脱げるのは、昆虫が変態するように、それで別の世界に脱皮できる時なのだ。彼女との出会いで、もしやその機会をつかめたのかと、ひそかに期待していたのに……

引用から明らかになる通り、「ぼく」は箱に執着する一方で、箱を脱ぎ捨て「別の世界」に脱出したいとも考えている。「ぼく」は病院で出会った「彼女の微笑」にそのきっかけを見出す「彼女の微笑」に「ぼく」が安心感を覚えるのは、「彼女からだと、いくら見られても、ほとんど見られた気がしない」からである。また、「ぼく」は「箱男が専門の覗き屋なら、彼女は天性の覗かれ屋なのである」とも言っている。つまり、「ぼく」と「彼女」との関係の根底には、見るもの／見られるものという歴然とした権力構造が存在している。元カメラマンと元ヌードモデルという「ぼく」と彼女の関係性からも、それは見てとれるだろう。二人の間にはサルトル的な眼差しの争いは始めから存在し得ず、見る側としての「ぼく」の優位は揺らぐことがない。ところが、贗箱男との会話以降、「ぼく」は彼女との間の権力関係を強化するのではなく、むしろそれを無化する方向へと向かっていく。

そして、「ぼく」と彼女の関係に訪れた最大の転機は、「ぼく」

が「白状するよ、ぼくは贗物だったんだ」と告白し、彼女の前に箱を脱いで見せたことにある。この後、「ぼく」と彼女は共に病院で暮らし始めるが、二人は「体の一部をたえず接触させつづけ」ることで、「相手を他人として識別できる」「半径二・五メートルの輪」の内側で生活する。「ほとんど相手が見えな合えば、けっこう見ているような気持になれたし、それ以上に、相手から見られていないという解放感が大きかった」と述べている。この「ぼく」の言葉からも分かるように、ここでは見るもの／見られるものという権力的関係の条件そのものが消去されてしまっている。彼らの世界には他者を他者として認知するための距離が存在しないため、「ぼく」は「見る―見られる」という関係を築くことに怯える必要がなくなる。また、二人の間に距離がないということは、監視塔と監獄の間に距離を作ることと効力を発揮していたパノプティコン的監視も通用しなくなるということである。「好きだとも、嫌いだとも、人格全体におれるような意見は全く口になかった」とあるように、ここでは「ぼく」も彼女も主体化＝従属化されることはない。それは「ぼく」が辿り着いた、視線を媒介としない新しいコミュニケーションの方法という、「別の世界」への入口であった。

ところが、その世界は長くは続かず、彼女は「ぼく」の元から去る。「ぼく」は病院内を閉鎖し、彼女を閉じこめようとする。彼女が自らの意思で「ぼく」の元を去ることを選択した時、すなわち、「ぼく」にとつての他者であると改めてみなされた時、

「ぼく」は彼女に激しい敵意を抱く。そもそも、「ぼく」が彼女との距離を限りなく零にまで近づけようとしたのは、小さなパノプティコンとしての箱を捨てようとしたのと同時に、自らもまた監視される可能性から逃れたいと願ったためである。

ところが、彼女が行方をくりましたことで、「服を着ている彼女に見られるのが、我慢ならないのだ」と述べているように、「ぼく」の中には姿の見えない他者＝彼女から監視されるかもしれない不安が再び生じてくる。そこで「ぼく」は「箱から出るかわりに、世界を箱の中に閉じ込めてやる。いまこそ世界が眼を閉じてしまふべきなのだ」と、「世界を箱に閉じ込め」ることで、世界そのものから脱出し、その外部から覗こうと考える。つまり、「ぼく」は監視される不安から逃れるために、小さなパノプティコンとしての箱を拡大し、彼女を含めた世界全体を一望できるほどの大きなパノプティコンを獲得しようとするのだ。小さなパノプティコンでは不徹底だった完全な匿名性の獲得。それは、書いている「ぼく」が「遺書」を残して物語から退場したように、自らの存在を極限まで希薄化し匿名化することで、「お前はぼくが書いた文章の登場人物の一人にすぎないのだ」という可能性を残し続けることを意味している。

だが、その目論見は上手くはいかない。彼女の部屋を覗きに行った「ぼく」は、「部屋だったはずの空間が、どこかの駅に隣合った、売店裏の路地らに変わっている」ことに気がつく。見慣れぬ都市の風景の中、「ぼく」は呆然と立ち尽くす他ない。ここで始めて「ぼく」は、彼女を閉じこめたつもりが、逆に自分

が病院内に閉じこめられてしまったことに気がつくのである。「彼女を探し出さなければならぬ」と考えた「ぼく」は、変貌した病院内の風景を箱の内部と重ね合わせる。

じつさい箱というやつは、見掛けはまったく単純なただの直方体にすぎないが、いったん内側から眺めると、百の知恵の輪をつなぎあわせたような迷路なのだ。もがけば、もがくほど、箱は体から生え出た外皮のように、その迷路に新しい節をつくって、ますます中の仕組みをもつれさせてしまふ。

彼女の逃亡をきっかけにして、「ぼく」は病院＝箱の中の「迷路」に迷い込む。この時、彼女の他者性の発露は、サルトル的な自分を物化する他者ではない、新たな可能性を「ぼく」に提示する。それは、「世界を箱に閉じ込め」ることで、より大きなパノプティコンの監視者たろうとした「ぼく」に対して、より複雑で、より理解しがたい、「迷路」を指し示す他者である。つまり、一方的に覗き込み、それら全てを一望できる監獄ではなく、決して全体をクリアーに一望できない「迷路」を「ぼく」の前に指し示すこと、それこそが彼女の他者性の本質であり、その逃亡の果たす意味であるということだ。かくして、看護師の他者性による「迷路」は、すべてを一望しようとする「ぼく」の望みを打ち砕く。

現に姿を消した彼女だつてこの迷路の何処かにひそんでいくことだけは確かなのだ。べつに逃げ去つたわけではなく、多くの居場所を見つけ出せずにいるだけのことなのだろう。いまならはつきりと、確信をもつて言うことができる。ほくは少しも後悔なんかしていない。手掛かりが多ければ、真相もその手掛かりの数だけ存在していいわけだ。

「ほく」が最後に辿り着いた結論は、「手掛かりが多ければ、真相もその手掛かりの数だけ存在していい」というものであった。すなわち、「真相」とは視点の数だけ存在し、それら全てが相対的かつ有効であるということである。一つの視点から覗き、そこから見える世界の全てを書くことに固執しても、その正当性を証明することは誰にもできないということである。それは、匿名的な視線の権力と予め定められた規則によって、一つの「真相」＝主体の同一性を定めてしまうパノプティコン的監視に対して、これと一つに確定することの決してできない、あやふやな自己の姿を映し出す。〈書く自己〉＝〈自己を見る自己〉と〈書かれる自己〉＝〈自己に見られる自己〉が一致しているかどうか、それは原理的に証明不可能である。何故なら、実際の行為と書くことの間には常に遅れが存在するため、〈書く自己〉と〈書かれる自己〉は決して重なることがないからである。

デイヴィッド・ライアンは『監視社会』において、コンピューター・データベースの登場は、パノプティコンの原理を刑務所、

病院、学校といった限定的な場所から解き放ち、社会の広範囲へと拡散させ、主体の構成を改めて再配置しながら、この原理を「スーパーパノプティコン」として作動させると述べている。ここでいう「スーパーパノプティコン」とは、デジタル化された監視のことであり、そこではクレジットカードやEメールの履歴といったデジタルなペルソナが主体の代理として作用し、それらを管理し統制するのが主な監視の役割となる。ライアンによれば、データベースは書くという行為に新たな流動性（空間的に転送可能）と持続性（時間的に保存可能）を付加することで、対象を記録し監視する行為を容易にする。同時に、私たちは携帯電話での通話、自動現金支払機、インターネット予約等々によって、自らの監視に参加している。現代の監視システムは、『箱男』が書かれた時代からは想像もつかないほど、体系的かつ巧妙になっているのだ。

だが、例えその権力がいかに強大なものになったとしても、それが作用するのは常に生身の個人に対してである。そのようなマイクロな視点から見た時、私たちに求められるのは、己自身の行為は己自身によって見通すことができる、言い換えれば〈自己を見る自己〉は〈自己に見られる自己〉の全てを監視可能であるという自惚れを捨て、己自身の内部に存在するズレ＝分裂と向かい合う覚悟である。そうした自己のズレを肯定できた時にこそ、「迷路」のような他者と向かい合うことも出来るのではないだろうか。パノプティコン的監視に対する抵抗の可能性はまさにここにある。すなわち、支配するか支配されるか

ではなく、自己の内部と同じように、他者との間にあるズレや違いを認め、相手の自由をそのままに受け入れるということである。ここで言う自由とはつまり、他者が自らにとつて根本的に理解不能であり、見通すことの出来ない存在であることに他ならない。

しかし、「ぼく」がそのまま病院に閉じ込められてしまったのか、あるいは「迷路」のどこかにひそむ彼女の元に辿り着くことが出来たのかは解明されないまま、物語は幕を閉じる。結末において聞こえてくる「救急車のサイレンの音」とは、病院の監視装置を象徴するものである。都市の中で絶えまなく鳴り響くその音の前に、「ぼく」は一人取り残される。このような『箱男』の曖昧な結末は、読者に後味の悪さを残すものだが、その後味の悪さこそがまさに、自己自身のズレと迷路を指し示す他者という、二つの可能性への気付きとなり得るのだ。

注

- 1 平岡篤頼「フィクションの熱風」〔早稲田文学〕・一九七三年八月
- 2 真銅正宏「箱男」の寓意——遮蔽・越境・迷路——〔国文学解釈と教材の研究〕・一九九七年八月
- 3 田中裕之「箱男」論（一）——「箱男」という設定から——〔梅花女子大学文学部紀要31〕・一九九七年十月
- 4 八角聡仁「箱男の光学装置——写真・都市・演劇——」

〔ユリイカ26（8）〕・一九九四年八月

5 佐々木幸喜「安部公房『箱男』の材源」〔国語国文〕二〇一二年六月

6 千金楽健「『箱』と『箱男』——寺山修二のラジオドラマと安部公房の小説——」〔近代文学注釈と批評〕・二〇〇七年三月

7 徐忍宇「半人半獣の夢——異人論を通して読む『箱男』——」〔九大日文9〕・二〇〇七年三月

8 ジャン・ポール・サルトル『存在と無 第二分冊』（一九五八年二月・人文書院）

9 ミシェル・フーコー『監獄の誕生』（一九七七年七月・新潮社）

10 （一）と同じ

11 田中裕之「箱男」論（二）——その構造について——〔梅花女子大学文学部紀要32〕・一九九八年十二月

12 （一）と同じ

13 デイヴィッド・ライアン『監視社会』（河村一郎（訳）青土社・二〇〇二年十一月）

付記

本論における『箱男』の引用は『安部公房全集24』（一九九九年九月・新潮社）によった。

（かたの・ともこ 博士後期課程）